

発行: 墨田区 (地域活動推進課)
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6202 FAX 03-5608-6934 ✉KATSUDOSUISHIN@city.sumida.lg.jp

2025年
(令和7年)
3月発行



ひと、つながる。
墨田区

バックナンバーは
こちらから



発行月が、令和7年
度から、9月と3月
に変わります。



「総武線ガード下で炎に取り囲まれなくなった人々」
(1945年3月10日) 三井喜久雄 画 (当時13歳)

■東京大空襲の概要
今年で1945(昭和20)年3月10日の東京大空襲から80年となります。当区に關東大震災と並んで大きな被害をもたらした惨事でした。マリアナ諸島のサイパン島などから飛び立った、アメリカ陸軍航空隊のB-29爆撃機279機は、1945年3月10日午前0時07分、焼夷弾の投下を開始して、空襲は始まりました。日本側の記録では、最初の通報は午前0時08分、その後約2時間30分、相次いで飛来するB-29の攻撃が続きました。火災は燃え広がり、現在の墨田区、台東区、江東区の大部分と、中央区、江戸川区などの一部を焼け野原に変えました。日の出が午前6時でしたが、その頃には火は収まっていたようです。その間に約100万人が罹災し、約10万人の方が亡くなりました。被害戸数は約47万戸とされます。

東京大空襲から80年

■今年度の企画展
すみだ郷土文化資料館では、1998(平成10)年の開館以来、戦争や空襲をテーマにした展示を17回行ってきました。空襲から80年となるのを機に、企画展「東京大空襲80年―新たな記録を探し続けて―」を5月25日(日)まで開催しています。今回は、区内の写真館で見つかった空襲被害写真の紹介、公文書から分かった復興小学校に市民防護のために設けられた地下室の紹介、体験者から体験と共に聞いた避難の軌跡、区内の戦争遺跡、2001(平成

■空襲下の実態は不詳
教科書にも載り、毎年マスコミがニュースに取り上げていますが、その内容はまだ分かっていません。火災の燃え広がり方、どこで誰が亡くなったか、被災した人はどこへ移ったか、遺体はどう処理されたのか、被害を撮影した写真はどれくらいあるのか、体験者は証言や体験記をどれくらい残したのか、公文書の記録はどこにどれくらいあるのか、これらは全て分かっていません。



「昔、街が焼かれた一虫けらのようになって」
(1945年3月10日) 川井 満 画 (当時12歳)



「父よ弟よー猿江恩賜公園に埋められた愛する家族」
(1945年4月27日) 中村俊子 画 (当時15歳)

13)年に当館とNHKが共同で発見した空襲死者の遺骨名簿の共同研究の最新成果を展示しています。その他、2階では常設展示として、空襲体験画の展示を行っています。これは2003(平成15)年に呼び掛けて体験者から寄せられた、体験を描いた絵約300枚の中から、30点ほどを展示しています。
戦争や空襲の体験者が減る中で、研究がそれに追いついていないと言えない状況があります。具体的な状況が分かることが、体験者の思いや出来事の重みを未来に引き継ぐための必要条件ではないかと考えています。
新年度も続けて、空襲をテーマにした企画展を予定しています。ぜひ、すみだ郷土文化資料館に足をお運びください。

(すみだ郷土文化資料館
資料館学芸員 石橋 星志)

国技館5000人の第九コンサート



第九の歴史

国技館5000人の第九コンサートは、戦後に台東区へ移転した国技館が、近代相撲の発祥地である両国に復帰したことを歓迎して昭和60年に始まりました。当初は1回限りのビッグイベントだった5000人の第九ですが、ベートーヴェンの交響曲第九番を5000人で歌い上げるという光景は大きな衝撃を与え、以後、4年にわたり続けられることとなります。また、5000人の第九の大成功により、音楽の持つエネルギーをまちづくりに活かしていこうという機運が生まれました。このことがきっかけで、墨田区は昭和63年に「墨田音楽都市構想」を提唱、世界的な指揮者である小澤征爾氏が率いる新日本フィルハーモニー交響楽団とのフランチャイズ提携に至りました。その後、平成9年にはすみだトリフォニーホールが開館するなど、まさに5000人の第九は「音楽都市すみだ」の発端となった歴史あるコンサートといえます。

第九でつなごう 世界の輪

令和7年2月23日に開催された第38回のテーマは、「第九でつなごう 世界の輪」。コンサート当日は、最年少の7歳から最高齢の96歳まで広い世代の方が全国各地から集まるとともに、大合唱を間近で体験しようと3000名以上の観客の皆さんが詰めかけ、会場内は大変な熱気で包まれました。

コンサートの第1部は、区と包括連携協定を結ぶ(公財)日本相撲協会の協力による太鼓と拍子木で幕開け、太鼓の音にあわせて新日本フィルハーモニー交響楽団の皆さんが登場し、ブラームス作曲『大学祝典序曲作品80』を演奏しました。



続く第2部では、皆さんお待ちかねの、ベートーヴェン作曲『交響曲第九番二短調作品125合唱付』「歓喜によせて」が披露されました。合唱団の皆さんは、この日のために約半年間、熱心に練習を積み重ねてこられ、本番では、大友直人氏の指揮により、4名の独唱とともにその練習の成果を出し切りました。合唱団の迫力ある歌声は国技館を大きく揺るがし、ベートーヴェンが第九に込めた人類愛と平和へのメッセージが世界に力強く発信されました。長年、連綿と受け継がれてきた第九を愛する皆さんの想いが、しっかりと未来に渡された瞬間でした。区では今後も文化芸術のもつ力で魅力的なまちづくりを進めていきますので、第九をはじめとした、多彩な音楽事業にぜひご期待ください。

(文化芸術振興課)